記念館会報　Vol. 12　　2015. 5. 13

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

# 「大河原孝一さんを偲ぶ会」北海道支部

札幌にお住まいだった「中帰連」元副会長の大河原孝一さんが、昨年 11 月にお亡くなりになった事は前号でお伝えしましたが、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」北海道支部が年明けの 1 月 24 日に、札幌市教教育文化会館で『大河原孝一さんを偲ぶ会』を開きました。

参加者は同支部会員のほか「受け継ぐ会」東京支部や岩手支部、記念館などからも参加し 24 名が集いました。また「撫順戦犯管理所」からも追悼文が届き、当日は同支部が作成した大河原さんへの思いを綴った『追悼文集』も配布されました。

最初に久能さんの司会で全員で黙祷した後、大原支部長の挨拶で始まりました。大河原さんと一番長くお付き合いがあった「旭川日中友好協会」会長の鳴海良司さんと、北海道大学大学院准教授の小田博志さんが弔辞を捧げました。その後、小学校の授業で大河原さんが体験を話したビデオが上映され、休憩を鋏み二部では机をロの字型に配置し、皆さんが大河原さんの思い出を話し合いました。

大河原さんは中帰連分裂後の「再統一」にも大変努力され、私たちの「記念館」の土地と中古倉庫の購入にも、全国の「中帰連」の仲間を訪ね歩きカンパを募り大変尽力を下さいました。お陰で記念館は家賃も要らず、立ち退きを求められる事もなく感謝しております。

大河原さんはシベリア抑留時代から勉強され、撫順戦犯管理所に収容されてからも先頭に立ち、積極的に「認罪教育」を指導されました。元職は国鉄職員で山登りやスキーが趣味で全国の山を登り、絵やスケッチも遺されています。

温泉も好きで奥ニセコの「新美温泉」が湯治の定宿でした。大河原さん有り難う御座いました！心からご冥福をお祈り申し上げます。

目　　次

・「大河原さんを偲ぶ会」・・・・・・・・1
・「絵鳩毅さん逝去」　・・・・・・・・・ 2
・「ノグンリ国際会議」発表評価・・・ 2
・「理事長、山梨平和ミュージアムで講演」・・・・・・ 2
・第 11 回「中帰連に学ぶ会」報告・・・3
・連載「記念館資料室から」・・・・・・4
・「かさじゅうコンテナ文庫」本寄贈　・5
・「訪中旅行」計画・・・・・・・・・・・6
・「むのたけじさん」講演会開催・・・・6
・「記念館日誌」・・・・・・・・・・・・6
・「お詫び」・・・・・・・・・・・・・・ 6

## 絵鳩毅さん逝去

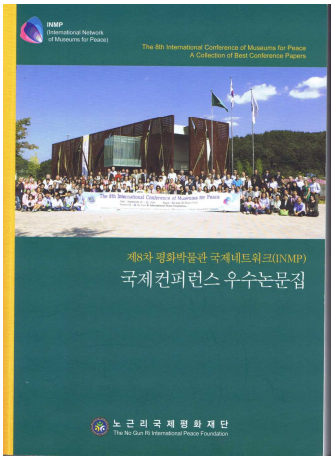
「中帰連」本部の常任委員長もされた神奈川県藤沢市の絵鳩毅さんが 1 月 3 日に急逝（享年 101 歳）されました。絵鳩さんは鳥取で生まれ千葉県に転居し旧制水戸高校から東京帝国大学で哲学を学び文部省に入省しました。しかし、尊敬する恩師の「著作検閲」を指示され「そんな事は出来ない」と文部省を退官しました。その後、山梨や長野の女学校で教師をされました。1941 年 7 月に招集を受け軍隊に入りましたが、あの時代にそれくらい「リベラル」だった絵鳩さんも反省しなくてはならない体験をされました。それは部下に「実的刺突」（中国人を的の代わりに突き殺す訓練）をさせた事でした。

絵鳩さんも戦争で 4 年、シベリア抑留の 5 年後、撫順戦犯管理所に 6 年間収容され人間性を取り戻しました。帰国後、一時教職に戻りましたが依願退職され、定年まで藤沢市東海岸郵便局長を勤めました。定年後には積極的に「中帰連」に関わり常任委員長も務め尽力されました。

昨年は「受け継ぐ会」神奈川支部主催の『百寿の人生放談』が開かれ、絵鳩さんが入所されていた介護施設の介護士さんや、女学校時代の教え子なども駆けつけお元気で話をされました。今回、前日 2 日に急変され急遽帰らぬ人となりました。葬儀ではご健在の奥様の悲しみが参列者の涙を誘いました。絵鳩さん、長い間有難う御座いました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 「ノグンリ国際会議」松村理事長の発表が評価

昨年、韓国・ノグンリの『国際平和博物館会議』（3 年に 1 回開催）に参加し、その 35 ヶ国 25 団体 43 人の報告の中から 13 人の発言が書籍化され、松村理事長の「中帰連、戦犯管理所、７３１」に関する発表が高く評価され 13 編の中に掲載されました。




この冊子は英語と韓国語で各国に配布され記念館でも所蔵しています。必要な方はＨＰにもアップしてあります。今後、海外への広報にこの資料の利用もできると思います。

## 松村理事長「山梨平和ミュージアム」で講演

「平和博物館ネット」にも参加している甲府の『山梨平和ミュージアム』が毎月開催している講演会に、松村理事長が招聘され 4 月 19 日に『細菌戦部隊と加害の歴史を考える』と題して講演しました。

松村理事長は「家永教科書訴訟」の証人もされ、７３１部隊の研究者としても知られていることはご承知と思います。当日は地図や研究データーなどの資料も配付され「マルタ」と呼ばれた中国人が「特移扱い」の隠語で７３１部隊に送られ、細菌戦などの生体実験・解剖に使われ、敗戦時までに 3000 人余りの全員が殺害されことなどの話がありました。また、その責任者の石井四郎は研究資料と引き替えに米から免責され、その証拠資料である「フェルレポート」や「ヒルレポート」の解説などもありました。

戦後、元７３１の軍医たちは医学界の中枢

で暗躍し、内藤良一などは日本ブラッドバンク（ミドリ十字）を設立し乾燥血漿で莫大な利益をあげ、その後、非加熱血液製剤でエイズを発症させたことも知られています。

また戦後、住井すゑ、永井隆、平塚らいてふ、都築正男、高村光太郎などは反戦・人権派の知識人と評価されていますが、戦時中、侵略戦争に加担したことを隠し反省していないと指摘、本当に平和主義者だったのは大塚金之助くらいではと話しました。

50 人余りの参加者は講演後の「質疑応答」でも、皆さん当時のことや現状の社会・政治についての真剣な質問が 1 時間近く続きました。

（「山梨平和ミュージアム」で）

## 第11回「中帰連に学ぶ会」報告

（2015 年 2 月 21 日）

### 「元戦犯たちの認識や行動はどのように受容されてきたか～相次ぐ中帰連会員の逝去を受けて～」

避けられないことではありますが、中帰連会員の御逝去が続いています。昨年 11 月には中帰連副会長の大河原孝一さん、年明けすぐに『季刊中帰連』初代編集長の絵鳩毅さんが亡くなられました。中帰連の「到達点」を後続の世代の「出発点」としていくうえで、何が求められているのかをあらためて考える場としました。

中帰連の人々が戦争体験や戦後体験を語り続けてきたのは、言うまでもないことですが、その目的は何だったのでしょうか。一つには、また同じような戦争が起きることが予感される中で、中帰連の経験と精神から学んだことを梃子にして、後続世代の一人一人が自分の持ち場で、戦争を可能にする社会の流れを食いとめ、二度と同じ過ちを犯さないようにしてほしいという願望からだったといえるでしょう。

一方で、後続の世代にしかできないこともあります。それは、閉じられつつある中帰連の人々の後半生がどのようなものであったかを「証言する」ことです。最期の最期まで、撫順・太原での反省と誓いを貫いた生涯を歴史にとどめるのは、後の世代がいなければできないことです。容易なことではありませんが、誰かが語り続けなければ、特異な歴史だっただけに、「なかったこと」にさせられかねません。中帰連の平和活動は、後続する世代が語り続けることで「完結」するといえます。

そのためには、加害証言で知られる 80 年代より以前の中帰連の歩み（相互援助、補償要求、組織分裂、組織率の低さなど）からも学ぶ必要があります。そこには、戦前的体質の残存、社会からの抵抗の大きさ、複雑な国際関係、中央と地方との落差、そして個々人の強さと弱さといった多様な教訓が示されています。その全体的な歩みを語ることは「戦争の時代」から「戦争に向かいつつある現在」を繋げることになるでしょう。また、戦争の反省が不十分に終わった社会では、再び戦争になる社会構造が残されていることを確認することにもなります。中帰連も決して特殊な団体ではなく、戦後日本社会が抱える様々な問題を共有していたのです。

以上から導き出せる今後の取り組みとして
(1) それぞれが接した中帰連会員の帰国後の歩みを、自分の言葉で語り続けること。
(2) 寛大政策の全体としての帰結を語り抜くために、（今井雅巳理事が中心に進めている）記念館の展示作りにみんなで取り組んでいくこと。

(1) の実践として、大河原さんの「偲ぶ会」について芹沢理事から、絵鳩さんの葬儀について松山理事から報告をして頂きました。(2)

の実践として、今井理事作成の素案を参加者で検討しました。議論の内容は省略しますが、デジタル化時代の展示のあり方や、展示を観る人をどう想定するかなど大枠に関する意見が中心でした。

時間の関係で、タイトルに掲げた内容に関する石田からの報告は次回以降に回すことにしましたが、代わりに、後続の世代の役割を考えるための手がかりを簡潔に提起しました。

『歴史通』という雑誌の 3 月増刊号に、高尾栄司「“人間の皮をかぶった鬼”に改造する『撫順収容所』の恐怖」なる記事が掲載されました。これは、2012 年 7 月に同誌に掲載された論考の再録です（タイトルのみ一部改変）。タイトルからしておかしいわけですが、中帰連の故・国友俊太郎さんへのインタビューや撫順管理所で書かれた「手記」などに基づいていながら、事実を 180 度ねじ曲げた捏造記事です。3 年前にきちんと反論しなかったため「正しい」ものであるかのように扱われ、再録までされてしまいました。中帰連はどんな些細な歴史歪曲も見逃さず批判をしてきましたが、戦後の言論界では一般に右派の虚妄を相手にしてこなかったことが、現在の惨状を招いた側面もあります。東京在住だった国友さんから聴き取りを行った人は少なくないでしょうから、「自分の聴き取り」に基づいて、国友さんの戦後の歩みを証言し続けることは、捏造記事への雄弁な反駁になりますし、戦争への歩みを押しとどめることにもなるでしょう。これらは、私たちの世代にしかできない課題です。

（事務局　石田隆至）

## 連載　記念館資料室から
## 第7回　格差と中国人蔑視とのつながり

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

近年、韓国人等に対するヘイトスピーチ（憎悪扇動）が拡がっていますが、日本経済の長期低迷やそれに伴う格差拡大、国際社会における地位低下による不満や自信喪失を埋め合わせる動きだという説明がよく聞かれます。これは、裏を返せば、豊かな時代の日本はアジア蔑視と無縁だったことを意味しますから、慎重さを要する見解です。ただ、経済や社会が停滞している時期には、その不満や不安が外部に転嫁される傾向にあることは、撫順戦犯の書き残した手記からも読み取れます。

今回紹介するのは、浪花謙治さんの手記「その後の私の歩んだ道」です。鳥取で「大工の父と百姓の母の間に長男として生まれ」、「貧しいその日暮らし」の生活をしていた浪花さんは、「小学校を出るとすぐ大阪市役所の給仕になり」、「夜学に通」いました。大阪でのサラリーマン生活に憧れたものの、学歴も人脈もないため出世の見込みもなく、いずれ「大学出の若い上役にあごで使われる事を考えただけで暗くなった」とあります。「半ばやけくそになって」いき、いずれは軍隊に召集されることを考えると「何もかも面白くなくなってきた」ため、役所も夜学も辞めて「転々と職を変えて歩いた」そうです。非正規労働に従事するなかで将来の展望が見えず「格差」に嘆く現在の青年のあり方と重なります。

1941 年 2 月に鳥取連隊に召集されると、初年兵訓練もほとんどないまま「北満」の炭坑地・鶴岡（黒竜江省）に渡り、汚れた服にホコリまみれで働く中国人の悲惨さを目の当たりにします。そこで浪花さんが感じたことが重要です。「日本人であることを心から喜んだ。外国に行ってはじめて日本に生まれた有難さが解る。雑誌で読んだ事が本当にうなづけるのだった。そして私は日本が神国であり万世一系の天皇が国を治めていることがどんなに恵まれた事だったのかが判った。私は

その後の私の歩んだ道
浪花謙治

（浪花さんの直筆原稿）

炭坑や街の中で日本人に使われている中国人の無気力な姿を見て、彼らが全く無智で野蛮であり、反対に日本人が優秀である事を知って喜んだ」。そして、「世の中をいとんだ私だったが、私の下になお下がある事を発見した私は、私がその惨めな存在でない事を喜んだ」。社会の底辺で苦しむ中国の人々は自分と同じ境遇にあったものの、共感して格差に怒りを覚えるのではなく、傷付いた自尊心を回復する対象として「消費」されてしまっています。

選抜されて上等兵になったときにも、「私は私が他人よりそう劣っていない事を知って喜んだ。初年兵が入ってきて、私は生まれて初めて人を使うことが出来る様になったのを嬉しかった」とあり、他者を自尊心回復の手段とする発想は共通しています。

さらに、憲兵の募集を知り、入隊前には定職に就いていなかったことから「私の生涯を憲兵にかける事を決心」します。昔を知る友人なら「驚く」ことだったと自分でも振り返っていることから、自尊心の回復はとても心地のよいことだったことが推察されます。実際に、教習隊で憲兵の威信の大きさを知るにつけ、「私はますます自分が人を支配出来る地位に進んで行ける事が嬉しかった。神はこの様な学歴も金もない人間でも見捨ててはいなかった。私は夢中になって勉強した」。試験に受かり、憲兵となったときには、出世の道を思い描いて「私は故郷の母の喜ぶ顔を想い浮かべ、これで親孝行ができると喜んだ。そして私達は戦争が私達の運命を切り開いてくれたことを喜んだのです」。

ここまでくれば、憲兵として大いに権力を振るったことは想像の通りです。「私は中国の人々が中国の土地の上を自由に歩く事を許さなかった。中国の人々が自分の土地を耕し、家で働くのを許さなかった。私は日本の聖戦に協力せず、日本に保護されている事に感謝しない中国人が人間並みの自由を要求する事はもっての外だと考えていた」。格差が民族蔑視を助長する構造は歴史の再現だったのです。

注目したいのは、「人前で話すことも出来ない様な臆病な」かつての自分が「なぜこうなったのか」に関する浪花さん自身の自己分析です。「私は人間として歩む道を知らなかった、ただ狭い自分だけの殻に閉じ籠もって個人の楽な生活を求めた。そして、私は悔やんでも帰らぬあの戦争の中に自分の利益を見出したのです。それは、他人、特に中国人民を犠牲にしてその生命と富とで賭うものだったのです」。今も中国を経済面で利用するだけの「共生」関係が大手を振っていることが気がかりです。

帰国後の浪花さんは鳥取に戻って豆腐製造に従事し、早朝から夜遅くまで夫婦で働き続け、中帰連の一員でもあり続けたことを付け加えておきます。

## 『かさじゅうコンテナ文庫』に本を寄贈

記念館副理事長で、「受け継ぐ会」岐阜支部長でもある今井雅巳さんのご紹介で、岐阜の「かさじゅうコンテナ文庫」に本を寄贈させて戴き、今井さんからご報告が届きましたの下記にご紹介致します。

岐阜県揖斐郡池田町に 150 年の歴史を誇る「万屋・田舎の百貨店：土川商店」があります。5 代目当主の土川修平さんは、私（岐阜：今井）の大学の先輩、勤務した高校・文化課の先輩でもありました。

道路を挟んだ店の前に、ブルーベリー園やルマティンギ（樹上ハウス）、石窯、バーベキュー施設などを備えた「土川ガーデン」が

2015年(平成27年)1月18日(日曜日)　20

西濃

西遊記 2015

池田「かさじゅうコンティナ文庫」

広場に手作り図書館

（「かさじゅうコンテナ文庫」を報じる地元紙）

あります。ここで様々な交流会（草の根交流サロン・食事会）、文化的な催し（屋外映画会、美術展、クラフト展、鷹匠の実演）が開催されています。

文化の香高いこの 1500 ㎡の空間に、「かさじゅうコンテナ文庫」が昨年秋に加わりました。

「子ども達が自由に本と親しみ、本を好きになる図書館を」との土川さんの考えから、廃車になったトラックコンテナ（幅 2.3、高さ 2.2、奥行き 9m）の空間に、ボランティアの手作り本棚 13 本。郷土資料、焼き物図鑑、美術全集、歌舞伎のプログラム、童話、絵本、伝記、マンガなど数千冊が友人、知人から寄せられ、「かさじゅうコンテナ文庫」と名付けて開館。

ここへ、「中帰連平和記念館」ロビーを占領していた、子ども向けの本、ダンボール 29 箱分を寄贈させていただきました。

仁木先生（初代理事長）が構想された東北の地震被災地の子ども達ではないけれども、岐阜の子ども達に、寄贈された多くの本が活用されています。

まだ 5 箱分くらいの受け入れスペースがあるとも、伺っています。多くの方々の善意で集められた本が日の目を見て、子ども達の夢を育む力になってくれれば、仁木先生にも喜んでいただけるのではないかと思っています。

なお、『かさじゅうコンテナ文庫』とは、老舗土川商店の屋号、傘に十字を加えた印「かさじゅう」から、命名されました。
2011 年 5 月 8 日に黒ネコヤマトで、岐阜から 585 冊、ダンボール 12 箱をお届けしました。　（今井雅巳）

## 「訪中計画」

敗戦 70 年で「再生の大地合唱団」と「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」主催、「NPO・中帰連平和記念館」の後援などで、8 月下旬から 9 月にかけて「訪中計画」を立てております。

## 「むのたけじさん講演会」のお知らせ

100 歳のジャーナリスト・むのたけじさんの「講演会」を下記の予定で開催します。

参加ご希望の方は【連絡先電話番号】を明記のうえ、下記、記念館に「ハガキ」でお申し込み下さい。会場が狭いため先着 50 名様とさせて戴きます。該当者には「電話」でご連絡させて戴きます。

・日時：6 月 13 日（土）13:30 ～ 15:00
・会場：「中帰連平和記念館」

## 記念館日誌

・1 月 11 日：「自由の森学園」の社会科の先生と韓国の先生の 4 人が来館
・1 月 17 日：『むのさんの 100 才を祝う会』理事長と事務局長が参加
・1 月 24 日：「大連理工大」から研究者来館
・2 月 15 日：共同通信の記者来館
・2 月 18 日：朝日新聞東京本社編集者来館
・2 月 21 日：第 4 回理事会開催
元朝日新聞記者・菅原幸助氏の寄贈本 7 冊
・3 月 29 日：中国で日本企業への投資などのコンサルタント活動をされている方来館
・4 月 15 日：オランダの新聞社・日本特派員、中帰連・稲葉さん聴き取りのため来館

## お詫び

『会報』の発行が遅れましたことをお詫び致します。

『NPO・中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
郵便振込口座名「NPO・中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（なるべく事前にご連絡下さい）